



近森会教育マネジメントシステム

(CEMS : Chikamori Education Management System)

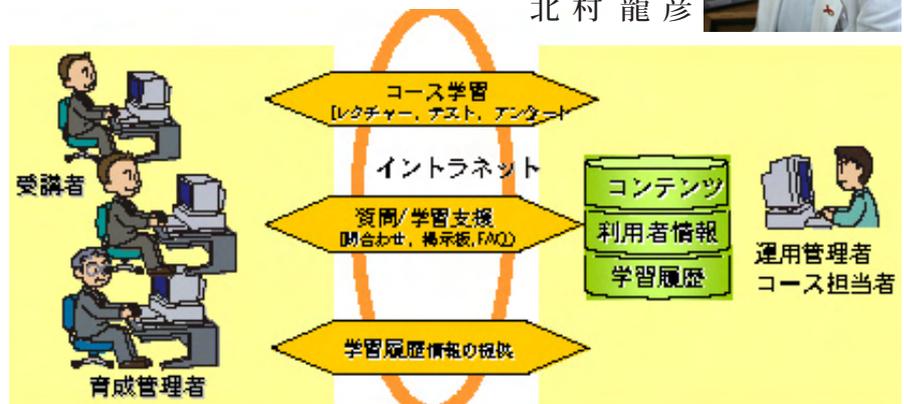
いつでもどこでも自主学習 可能な場をオンラインで

近森病院 副院長
北村 龍彦



医療の安全と質の向上のためには、国家レベルでの取り組みが不可欠ですが、医療機関全体の基盤整備とシステム構築の取り組みとともに重要な課題として、職員一人ひとりの人格の涵養と質の向上もまた重要と考えられます。

職種に応じた知識レベルの向上とスキルアップは医療人に課せられた課題であり、これらがある一定のレベルを保証されない限り、安全と質の保証は



確立不可能といえます。

「ひとはミスを犯すもの」という前提に立ち、ミスを回避する手立てのひとつとして、業務の標準化と職員への教育・遵守・維持管理があります。医療機関で各種委員会を立ち上げ、課題を絞り検討し、種々の改善への取り組みが行われています。

しかし、委員会の検討結果や成果物である各種のマニュアルや手順を標準化しても、多忙な業務に追われる全職員に浸透・実践されなければ各委員会や作成者のみの知識・成果物にとどまります。

そこで、新人を含めた全職員が遵守すべき手順やマニュアル・規定集などの教育・学習手段として、近森会の病院情報システムのネットワークを利用した教育ツールとして近森会教育マネジメントシステム (CEMS) を構築しました。これはWEBを利用したナレッジマネジメントシステムで、e-learningとも呼ばれており、全職員に周知徹底すべき知識・規則などや標準的な近森会の手技や手順を、オンラインでいつでもどこでも自主学習可能な場を提供し、また教育・学習の進み具合や成果を管理できるシステムです。(次頁へ)

愛のスープ

近森 正幸



このほど近森病院の地域医療講演会で、料理研究家の辰巳芳子さんに「いのちを支えるスープについて」の話をさせていただけることになった。辰巳さんの本のなかに「四季のスープ」というのがあり、表題に「いのちを養う」という言葉が添えられている。

たまたま妻がその本を買っていて、そのなかで紹介されている、椎茸のスープを始め茄子と大麦のスープなど8種類を家で作ってくれた。

なかでも、干し椎茸のスープの材料は昆布と干し椎茸、梅干の種子で、それぞれの材料を吟味して、心を込

めてつくれば澄みきったまさに「いのちを養う」豊かなスープが出来上がる。

昆布と干し椎茸だけでは単なる美味しいダシだが、梅干の種子を二〜三コ入れるだけで、梅干の酸味と塩味加わり絶妙なスープに変身する。

現在の病院食は安くて栄養のバランスのとれた食事であるが、戦後の私たちが小さい頃には、よく病室の庭先で母親やおばあちゃんが七輪に土鍋をかけて食事をつくってくれたものだった。

そのときに味わったオモユや野菜スープのしみじみとした味は今でも覚えていて、辰巳さんのスープに通じるものがあるように思う。

あんなに一生懸命何回もつくってくれたスープが、最近とんと出なくなったのは、私への愛が冷めたのではなく、妻の奥歯の大治療が終わったためのようだ。

(理事長・ちかもり まさゆき)

(前頁より) 初回に提供予定のコンテンツ(学習内容)は右のごとくであり、近森会の安全で質の高い医療提供のために必ず実施していただきたいと考えております。

今後は、**医療安全委員会の警鐘事例や各種委員と連携し、職員向けに遵守すべき内容などをリアルタイムに作成・発信**していく予定です。管理・運用面の調整を行い展開しますので、安心・安全で質の高い近森会の医療提供のためにご協力をよろしく願います。

CEMS 2006/07

初回公開コンテンツ	
全職員向け教育	
救急蘇生	BLSとハートコール
医療安全	医療安全・分析編
	医療安全・報告編
	医療安全・応用編
感染対策	近森会・感染対策マニュアル
看護・介護・リハビリ関係対象	脳卒中片麻痺の移動・移乗
新人職員向け教育	
ICジェネラル(感染管理基礎知識)	26項目
画像診断部	画像診断部
薬剤部	薬剤師
検査部門	検体検査
	細菌
	生理検査
	病理
	輸血
	技師 剖検依頼

参照用	
DPC 関連	医事課用
	医師用
	看護師用
個人情報保護 医療従業者向け	はじめにお読みください
	基礎編
	事例編
	管理編
	Winny(ウィニー)等での個人情報流出について
精神保健福祉法	医療対策に関わる精神福祉法の概要
院内メールシステム	基本操作編
防災マニュアル	消防マニュアル

2006年、心肺蘇生法が変わる!

基本に帰ろう

質の高いCPR(絶え間ない心臓マッサージ)と早期除細動

内科循環器科部長 川井 和哉



循環器救急は、特に病院前対応が重要な疾患が多く、ER・心カテ室・集中治療室・一般病棟・リハビリ・退院まで結びつけて、初めて医療が完結します。こ

れからも、このような心肺蘇生法の普及活動を通して、高知の救急医療に貢献していきたいと思えます。

早速、**8月13日にAHAのBLSコース、8月19日にICLSコース**を行います。奮っての参加をお願いいたします。

2005年11月に国際蘇生連絡協議会(ILCOR)の『心肺蘇生と心血管救急治療における科学と治療推奨の2005年国際コンセンサス(G2005)』が発表されました。わが国の『救急蘇生法の指針』の出版は2006年10-12月予定ですが、現場ではすでに新ガイドラインへの移行が始まっています。

当院では、5月20日にアメリカ心臓病協会(AHA)や救急医学会認定インストラクターが中心となり、G2005準拠の第10回近森ICLS(ACLS基礎)コースを開催しました。

新ガイドラインのコンセプトは“**基本に帰ろう:質の高いCPR(絶え間ない心臓マッサージ)と早期除細動**”です。実際にやってみて、より現場に沿ったガイドラインになっています。シンプルで覚えやすく、絶え間ない心臓マッサージが可能です。翌日の院外心肺停止症例から、すでに新しい心肺蘇生が始まっています。幸い、1例目は蘇生に成功しました。

このように早い対応ができたのも、今まで続けてきた心肺蘇生法の普及活動があったからだと思います。当院では、全職員を対象とした1次救命処置(BLS)講習会、医療職を対象とした救急医学会認定ICLSコース、AHA認定BLSコース・ACLSコースを定期的に開催してきました。

修了者は現在、BLSコース681人、ICLSコース186人、AHAのBLSコース23人、ACLSコース11人と中四国でもトップレベルの人数です。他施設からの受講生も多く、彼らが当院の、そして高知の心肺蘇生レベルを高めてくれることを期待しています。



観察に感心

犬や猫を飼っているスタッフが何人かいて、昼休みにペットの話題ができることがしばしばあります。子犬の夜鳴きに付き合っただのそばで幾晩か寝た話、子どもが拾ってきた犬を嫌々ながらしばらく飼っていたものどうしても好きになれず、遠くの山の中へ捨ててきたのに数ヶ月後にひょっこり戻ってきて感激し再び飼い始めた話、臆病な犬の性格を鍛えたくて休日には三度もハードなお散歩コースに連れ出すという話など、話題には事欠きません。どの話も飼い主のその人らしさが表れていて、面白く聴かせてもらっています。



私の顔よりもっと大事です! ということで...ルイちゃん



我が家にも、つい最近チワワの子犬がやってきました。生後二カ月にもならない子犬なので誰にでもじゃれついてきますが、飼い始めて三日目あたりには家族のメンバーによって甘え方が違うことに気づきました。こんなに小さくても人間のことをちゃんと観察して態度を変えているのかと思うと、おかしいやら感心するやら。ともあれ、皆それぞれにペットに癒され、仕事への英気を養っていることには間違いのないようです。

(第二分院5階病棟看護師長 山下ちぐさ)

栄養サポートチーム (NST) スタート丸3年を迎えて

食べることと動くこと

2003年夏のスタートから3年間を振り返って、栄養サポートチームの現在とこれからの展望してみたい。



最近の栄養への意識の高まりとともに栄養サポートチーム (以下 NST) によるカンファレンスやラウンドを通じて2003年7月から栄養のサポートを開始した。近森会の NST のコンセプトを挙げておくと、①全病院、全病棟、全科、全患者型の NST の立ち上げ②最終的には地域 NST を目指す③リハビリテーションとの密接な連携④集中治療棟から早期 NST の開始、ということになる。

入院当初よりスクリーニングにより問題のある患者を選び出し、NST にリハビリスタッフも参画し、チームで対応、そうすることで合併症を防止し、長期入院を防ぎ、在院日数を短縮している。食べるだけでなく、リハビリにより身体を動かし骨格筋をつくり、出来る限り早く自宅に帰っていただけるよう努力している。

原則として腸が使える患者さんは腸を使い、口から食べられない場合は経腸栄養を行ない、胃腸の穿孔や腸閉塞、嘔吐の患者さん、消化管出血など、どうしても腸を使えない場合のみ、できるだけ早期の高カロリー輸液を行なっている。腸を使うということは、腸粘膜の萎縮を防ぎ MRSA 腸炎などの合併症を防止するだけでなく、リンパ組織が活性化し、細胞免疫が高まることになる。

近森病院ではこの3年間で食事の提供数は年々増加し、経腸栄養に使用されている濃厚流動食も飛躍的に増加している。輸液は栄養の意識の高まりとともに、最初の1年間は増加したが、2年目以降は食事の増加に伴い、減少に転じている。3年間の NST の活動で医師、看護師の意識が変わり、心不全や肺炎で人工呼吸をしている患者さんでも早期から経腸栄養が開始され、そのみで十分なカロリーと蛋白、水分が投与されている。抗生剤の使い方も大きく変わってきた。

この5年間、65歳以上の入院患者さんは63%から75%に増えており、

医療法人近森会理事長 近森 正幸

急速に高齢化が進んでいるが、医師、看護師による迅速で確実な根本治療とともに、栄養やリハビリテーションのチーム医療により、5年間で在院日数は短縮され、入院稼働率はアップし、3カ月以上の長期入院も少なくなってきた。

チーム医療の基本は専門性の高い多職種が集まってチームアプローチを行なうことである。これまでのような医

師と看護師中心の人手の少ない病棟で、輸液と抗生剤、絶食の医療から、出来るだけ輸液や抗生剤を使わず、多職種チーム医療で人手をかけてする医療がこれからの医療ではないだろうか。

どんな状況でも、少なくとも腸を使って栄養を吸収し、リハビリで動くことにより廃用を防止することは、人間の身体にとって最も自然な、患者さん本位の医療の原点であると思う。

1947年高知市生まれ
高知新聞企業出版調査部勤務
1985年こども詩集『やまもも』の担当となる。
1986年『やまもも親と子詩の教室』を高知市で開催。
現在は県内4カ所で毎年開催
2006年『やまもも』第30集発刊。年間数冊の本を編集
1983年和紙人形展をはじめ、全国和紙人形展をはじめ、美濃和紙の里会館、ポルトガル、オランダなど、国内外の和紙人形展に出品。



花方 憲子

高知県こども詩集『やまもも』に携わって

院外エッセイ

小学生のころ詩を作ることが大の苦手でした。宿題に出た詩をどう書いていいのかわからず、頭の中は真っ白で何も出てきません。結局母に手伝ってもらい提出。書けない自分が情けなくひどく恨めしい気分になったものでした。そんな私が高知県こども詩集『やまもも』の担当になったのですから、これはもうびつくり。

第一集が発刊されたのが一九七七年。私が担当になった当時は、創設時から携わっている先生もいらつしゃって、新米の私は恐る恐る中に入り、意見も言えないまま縮こまっていました。

夏休みの一日、子どもたちに詩を書く体験を「やまもも親と子詩の教室」を開催しています。児童詩研究会の先生たちは、子どもたちの生活の中で一番印象に残っていることを頭の中に描かせ、その場面にそのまま書いてもらい(描写)と指導します。そうすることで子どもたちの弾むような声が、普段の言葉のまま生き生きと飛び出してくるのです。子どもたちの心を上手に解放して、言葉を引き出していました。「なるほどなあ」と感心したことでした。

『やまもも』の詩が読む人に感動や共感を与えるのは、詩から作者の生活ぶりや息づかい、家庭

の様子や姿まで目に浮かぶからでしょう。物事をしつかり見つめる目、感動する心を育てることが、生きる力につながるっていくのではないのでしょうか。さて、今年の『やまもも』第三十集にこんなかわいい詩をみつけました。

かぞくでおしよくじ 一年女子

きょう、かぞくでおしよくじをしました。

なんできょう

おしよくじにいったかというと

むかし

あや花がうまれるずっとまえに

おとうさんとおかあさんが

けつこんした日だからです。

わたしはそれをきいてびつくりしました。

そんなだいじなことは

はよういってたらわんこまります。

おてがみだつてかいちやりたかったのに。

「おとうさんとおかあさんは

むかしあや花のために

けつこんしたんでしょ。」って

ラジオで朗読され、高知新聞夕刊(毎週火曜日)で紹介されている『やまもも』は、今や高知の文化となった観があります。なくてはならない子どもたちの宝物です。

第4回 公開県民講座のご報告

第二分院 ストレスケアセンター「パティオ」
主任 岡村 邦弘



開演前、ちょっとだけ陰い表情の講師たち



スタッフ集合。皆さん、お疲れさまでした！

身近な人がうつ病になったら

公開県民講座も第4回を迎え、今回は第二分院が初めて担当することになり、7月15日高知市文化プラザかるぽーと大ホールにて開催いたしました。

テーマは当院でストレス外来、ストレスケア病棟、ストレスケアセンターと、包括的なうつ病の治療を力に入れていることから、「身近な人がうつ病になったら？」として、二部構成の講演と「パティオ」のパネルを展示しました。

当日は各地で今年一番の暑さを記録したようでしたが、暑い中たくさんの方に足を運んでいただき、あっという間に席が埋まってしまいました。

講演内容は渡邊真里子医師による「うつ病についての診断と治療」について話がありました。その中でも家族の接し方など普段聞くことのできないキーワードがいくつか盛り込まれておりました。次に宮崎洋一副院長より「回復期から復職」についての話がありました。実際の場面で復職は思っていた以上に難しいこと、自助努力と周囲のサポート体制が必要不可欠であること、復職後の注意点など、具体的な話を聞くことができたと思います。

最後に働き盛りの方へ。うつ病はいつ、誰に起きるかわかりません。頑張りすぎず、時には自分に優しく……。



暑い暑い…。外で誘導係りの皆さん



● 8月の歳時記 ●

向日葵 ヒマワリ

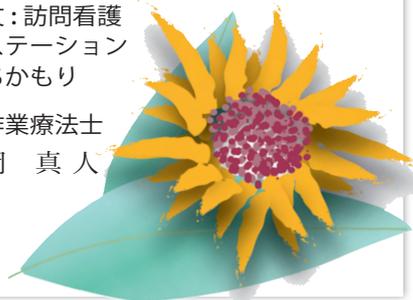
語源は「日廻り」、日を追って回る花という意味です。実際に若い茎や咲き始めの花は太陽を追って回ります。しかし花がよく開いた後は動かなくなり、多くの花は東向きに咲きます。

向日葵は夏の花の中でも、花の色や形が力強さをイメージさせます。夏バテしている人間の方は笑い飛ばされて

しまうような気がします。今年の夏はぜひ向日葵を育ててみませんか？

文：訪問看護
ステーション
ちかもり

作業療法士
岡 真人



きちんと

学びを 実践に活かす 智恵

2006・6・28(水) 高知大学で障害児者の支援を考える講演会開催

ハッスル研修医 第二部 vol.3

私は、この一年を内科(6カ月)→ER(3カ月)→外科(3カ月)の順に回らせていただく予定です。研修を始めてはやくも3カ月が経とうとしています。指導医の先生をはじめ多くの先生方や看護師さん、スタッフの方々、先輩の研修医の先生、同期の研修医のみんなのおかげで、それなりに元気に研修をさせていただいています。

学生の頃は自分がどんな医師になりたいかを考えてもピンとこなかったのですが、最近やっと10年後にはこんなふうになりたいなあという理想がおぼろげながら見えてきました。しかし、現在の私はとても陰

一年生

研修医
三宅 千智



しい顔で仕事をしているようで上の先生からたびたび「顔がおやじになっているぞ!」と御指摘を受けています。とほほ……。

この先2年間の近森病院の研修生活の中で色々なことがあると思いますが、最後にはここで研修してよかったと心から思えるように前向きに頑張っていきたいと思っています。どうぞ、よろしくお願いします。

社会福祉制度が整備された代表的な福祉国家として名高いスウェーデン。そのスウェーデンの障害児教育が専門の高知大学教育学部・是永かな子ゼミで学ぶ近森リハ病院のMSW 上田真弓さんが実行委員を務め、両国の現状を通して障害児・者支援を考える講演会が、このほど高知大学朝倉キャンパスで開催された。スウェーデンのどのような方式なら日本に取り入れが可能なか、日本は障害者自立支援法でどうなっていくかなど、東京都東大和市の自立生活センターの事務局長で自身も24時間の介護が必要な海老原さんと、スウェーデンのリハセンターで働く河本さんが講演。上田MSWの司会進行で質疑応答も活発な、今後活かせる勉強会となった。





看護部

キラリと光る看護

その26

「ゼロ災で行こう!ヨシ!」

飛行機の離陸前、美しいフライトアテンダントがきちんと安全確認の指差しチェックをしている姿を見て「やってる やってる」と納得し頷いた経験のある人もいだろう。

当院はヒヤリハット事例の分析から、点滴注射で輸液ポンプを使用する時は、「点滴台に吊るされた薬剤とルート・流量計の設定・患者さんの名前の確認について一連の流れを指差し呼称しつつおこなおう」と決めている。しかし恥ずかしいとか、格好が悪いとか、忘れていたなどから、なかなか実行・習慣化が難しくセー

フティナースを歯がゆくさせていた。

ところが医療安全担当の看護師長が危険予知活動実践セミナーに出た後「これだ!」と刺激をうけ早速講師を招聘して院内研修会をおこなった。

実技を中心としたグループワークでわいわいがやがや本音で討議し、安全迅速なKY(危険予知)サイクルを学び実践しあった。一日の研修が終わる頃には意識が深まったのか、指差し呼称が自然にできるようになっていた。翌日からさっそく実行する部署も現れた。まず朝の申し送りから師長のトーンが変わってきた。

スタッフに「体調大丈夫?」などの声掛け健康チェックを入れ、「タッチアンドコール」の掛け声をして「0災で行こう。ヨシ!」と指差し呼称で始業のスタートをした。

現場でも「~のお注射をさせていただきます。お名前をおっしゃってくださいませんか。はい!点滴名OK!名前OK!ルートOK!ヨシッ!」と言いつつ出た。眺めていた患者さんが間髪を入れずそのナースにむかって「肉付き、OK!ヨシ!」と返してきてナースを大笑いさせたというオチまで発生した。容(かた)から入り魂を入れる作法は遠くナイチンゲールの戴帽式に通じる。戴帽式をしない大学(かた)が容(かた)自由で魂への畏敬がわかる学生をめざしているところもあるが、当院はまだ(かた)まず容(かた)である。(看護部長 梶原和歌)

第32回 地域医療講演会を開催/高知大学医学部外科学講座外科1・

花崎和弘教授をお迎えして

豊富な学識に基づいた精緻な手術

消化器外科部長 北川 尚史

さる6月23日に花崎和弘教授が教授就任後初めて近森病院を訪問、講演された。

まず話されたのはプロタグランジンの肝切除中投与の効果であり、動物実験や豊富な症例をもとにその有効性を実証された。

続いて人工臓器の開発についてであった。人工臓器は世界の最先端の研究レベルにあるだけでなく、もうすぐ実用化に近いものであった。しかしわれわれ外科医にとってもっとも興味深かったのが、ビデオによる手術手技の数々であった。

特に肝切除術や膵頭十二指腸切除術の手術手技には目を見張る思いであった。単なる手術屋というのではなく豊富な学識に基づいた精緻な手術の数々であった。

またすべてに貪欲に研究心を持ち、常に研究と臨床の両面から物事をとらえる姿勢、また医学生、研修医に対する教育指導法などを拝聴し、その外科学に対する真摯な態度に心打たれる思いであった。われわれも先生よりその外科学に対する情熱、学識等を分けていただいて地域医療に貢献すべくより一層の努力をしていきたい。



第6回 公開県民講座のお知らせ

日時 平成18年10月7日(土)
午後2時~4時

会場 高知市文化プラザ

「かるぼーと」大ホール
「よくわかるおなかの病気と治療法」

講師 北川尚史 消化器外科部長

胆石症のおはなし

岡田光生 消化器内科部長

胃と大腸のおはなし

栄枝弘司 消化器内科部長

ウイルス性肝炎のおはなし

薬剤投与病院研修レポート 病院研修を終えて

土佐市消防本部 分署分隊長 横川 宏二

九州研修所において薬剤追加講習を受け、そして近森病院で6月19日(月)から23日(金)までの5日間、ER・根岸部長のもとで薬剤投与に関わる静脈確保及びCPA患者への薬剤投与並びに患者観察要領等をご指導していただきました。

救急患者受け入れ決定後、ドクターや検査機器等を各スタッフが手際良く手配し、搬入と同時にドクター・看護師等が素早く救急処置を施し知識・技術共に、さすが地域救急医療の中核を担う病院の質の違いだと学ばせていただきました。

根岸先生のご配慮により患者さんから承諾をいただき、ライン作成から静脈確保、また最後の日にはCPA症例があり薬剤も投与でき貴重な経験をさせていただきました。人形で静脈確保の練習を積んで来たつもりでしたが、いざ生体への穿刺となると血管のうっ血の度合・硬さ・太さ等違いがあり、慣れるしかない(実践あるのみ)実感しました。

患者さんからの承諾、そして穿刺している自分、先生には大変気苦労されたことと存じます。大変感謝しております、この経験を次への一歩とし、数少ない機会であるCPA症例において躊躇なく静脈確保し、適応症例には薬剤を投与し一人でも多くの人を救命したいと思います。

最後になりましたが、根岸先生・土居先生をはじめ、ER看護師の皆さん、快く穿刺させていただき有難うございました。

左から根岸正敏 ER部長、横川救命士、近森院長



改めて感染管理の重要性を 思い知る絶好の機会に

新館 6階西病棟 リンクナース 矢野 晶子

2006年のAPICの総会はフロリダ州のTAMPAで開催されました。

今年、近森病院からは北村龍彦副院長と私の二人での参加でしたが、ICNJ(日本の感染管理認定看護師の団体)が行っている同時通訳付きのツアー(総勢40名)に参加させていただきました。

6月11日の7時過ぎに成田空港を出発し、ニューヨーク経由でTAMPAに到着しましたが、スーツケースは到着しない、灼熱のTAMPAのはずが12日にはTropical Storm "Alberto"の直撃体験というアクシデントからの旅となりました。

12日は、鳥インフルエンザ、SARSなどを例にしての感染管理の緊急的責務、地球規模での健康管理(肥満や禁煙対策)、インフルエンザ予防接種の重要性と摂取向上についてなどの講演を聴講し、13日は午後から、Tampa General Hospitalの病院見学に参加しました。

施設設備で驚いたのは、鋭利物廃棄box(当院のようなboxタイプではなく、郵便受けタイプの薄いものだったが)、壁にかけられていて、施錠管理ということでした。これは、麻薬中毒患者などからの盗難予防で、日本とアメリカ

の治安の違いを感じるようになりました。また、感染経路別対策の表示が部屋にA4サイズのカードで明記されており、

患者への倫理的配慮の前に、病院のシステムでの設置と聞き大変驚きました。

16日には、CDC(米国疾患管理予防センター)の施設見学に参加させていただきましたが、ここは、空港並みのセキュリティで手荷物検査(靴も脱がされる)、パスポートを求められ、敷地前にあるCDCの看板近くから、怖い警備員が待機しており、当然館内、敷地内写真撮影は一切禁止という徹底ぶりでした。

今回ツアーに参加させていただき、自己の学習不足を多に反省する日々でありましたが、多くの感染管理認定看護師の方々と出会い、その人たちの自信と熱意に刺激され、改めて感染管理の重要性を思い知る絶好の機会となりました。まだまだ、学習不足ですが、今回の経験を活かせるように活動していければと思っています。



▼2006年APIC総会が開かれたフロリダ州TAMPAの会場全景



▶とてもカラフルなオープニングセレモニー

第5回 公開県民講座

四万十会場

入場無料 申込不要

9月16日(土) 午後2時~4時
四万十市文化センター大ホール

中年以降のくび・腰・膝の異常
あなたは調子が悪くて困っていませんか?

講演

- ①「股関節の痛み」
(変形性股関節症と関節リウマチ)
整形外科 科長 西井幸信
- ②「腰痛・下肢の痛みやしびれ感」
(変形性脊椎症と骨粗鬆症)
整形外科 部長 道中泰典
- ③「肩こりや手足のしびれ感」
(頸椎症)
整形外科 部長 西田一也
- ④「O脚と膝の痛み」
(変形性膝関節症)
整形外科 部長 衣笠清人

※問い合わせは地域医療連携室まで

リレーエッセイ

遺伝子の存在

言語療法科 科長

矢野 和美

「おやすみー」。慌しく仕事から帰って、僅かな時間を子どもと過ごした後、寝顔を覗き込む。今日も一日が終わった…と感じる瞬間である。

母親になって数年、最近とくに「遺伝子の存在」を意識するようになった。親からみると、大抵は「似て欲しくないところばかり似て…」ということになるようだが、我が家も例にもれず、である。

細やかな気配りをしながらも肝心なところが抜けている娘、甘えん坊だが言い出したら絶対後に引かない息子。似てるよなあ、とただ単純に嬉しいこともあるが、苦笑することもかなり多い。

それにしても、夫と私の一部ずつを受け継いで、ちゃんと、独自の性格を



持って成長しているのだから、とても不思議である。しかも、それは元々生まれ持ったものとして、彼らの中には根付いているのである。子どもを叱りながら、自分の中にも同じものがあると感じた時は落ち込んだり、腹が立ったりすることはしょっちゅうだが、自

分に自信がなくなった時、子どもたちの人間性に触れて、救われることも少なくない。

人間誰しも得意なことと苦手なことがあって、苦手なことが一変して得意になることはないらしい。苦手なことを無理に克服させるより、得意なことをどんどんやって自信をつけていくことのほうが生きる力として蓄えられやすいし、結果的に苦手なことにも取り組んでみよう、というチャレンジ精神も生まれやすい。それが受け継いだ遺伝子を大切に生きていくことじゃないか、と子どもを通じて感じているこの頃、だんだん母親が板に付いてきたかも……。

四万十の皆さま
お待ちしております!

昇格しました。

乞

熱烈

応援



放射線科 科長 宮崎 延裕

5月16日付けで放射線科科長を拝命致しました。研修医2年目を近森病院で過ごしましたが、思えば私の放射線科医としての礎が築かれたはこの1年間でありました。2001年10月より再赴任し、早いもので気付けば近森での生活が10年のキャリアの半分を超えるまでになっていました。

包括医療制度の導入により、これまでも増して的確・効率的な画像診断が求められ、低侵襲治療であるIVR(画像ガイド下で行う低侵襲治療)の重要性もさらに増してくると思われ、放射線科医としては厳しいながらもやりがいのある状況にあると感じています。私にとって一つの節目となる今年、気持ちを新たに日々邁進していこうと思っています。



HCU病棟 主任 山口 恵

6月15日に主任心得の辞令をいただきました。私に務まるのだろうか…と今は不安が一杯で「主任さん」と呼ばれると緊張と重責を感じて、顔が引きつってしまいます。

HCUは集中病棟と一般病棟の中間に位置し、忙しい病棟ですが、個性溢れるスタッフみんなが協力して頑張っています。スタッフそれぞれの個性をさらに生かしながら、今まで以上にチームワークの良さが発揮でき、みんなが笑顔で仕事ができる病棟となるよう支えていけたらと思っています。より良い看護・チーム医療が患者様に提供できるように、知識・技術の向上、接遇や業務の見直し、コメディカル・他部署との連携にも積極的に取り組み、患者様に満足して頂ける病棟を目指して、日々スタッフと一緒に、精一杯努力して行きたいと思います。まだまだ未熟で、ご迷惑をかけることもあるかと思いますが、佐野師長のもと頑張っていきますので、ご指導のほどよろしくお願い致します。m(__)m

内視鏡検査室探訪

エーザイ DIGSCOPE



▲消化器内

科の栄枝弘司部長

をはじめ、青野礼科長や岡

田光生科長、内視鏡技師の大俣久子主任看護師のインタビュー記事など、現状がよく伝わる盛りだくさんの内容となっている

●患者さんの快適性とプライバシー保護を重視し、昨年8月1日に本館7階にリニューアルオープンした内視鏡センターとスタッフが、内視鏡学の研究と発展を目指した機関誌『DIGSCOPE』で大きく特集された。専門性が高く、それでいて一般向けにも解りやすい、極めて巧みな編集がなされている。

手間暇かけて理想の母

近森リハビリテーション
病院 3階西病棟

看護師 桑原 渚 ▼

今の私

26年前の母と私です。少しおっちょこちょいなところもあり



ますが、母は私にとって、理想の母親像。とにかく手間暇かけて育ててくれました。いま振り返ってみると、専業主婦だったから出来たことではなく、母だから出来たことだと思います。私もいつのまにか写真の母の年齢を超えました。母が私にしてくれたことを、私の子どもにもしてあげたいと思っています。自分がどんな母親になるのか、楽しみです、その前にまず結婚、ですよね……。

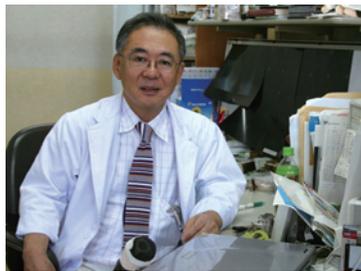
6月の診療数

近森会 外来患者数	19,312人
近森会 新入院患者数	903人
近森会 退院患者数	876人
地域医療支援病院紹介率	84.85%
近森病院平均在院日数	13.52日
近森会 平均在院日数	20.18日
近森病院救急車搬入件数	467件
うち入院件数	234件
手術件数	351件
うち手術室実施	237件
全身麻酔件数	115件

企画情報室より

シリーズ●クリニック探訪18

クリニックひろと (旧・楠瀬病院)

長浜小学校から徒歩1分弱
(高知市長浜 4823 番地) ☎781-0270

院長・楠瀬 博人 (ひろと)
S21年11月3日、高知市長浜
生まれ。趣味は読書、写真、
天文、映画鑑賞



▲当院は祖父の代より約85年間、長浜地区で診療を行なっております。現在の場所には、昭和55年に現院長が楠瀬病院を開設し、平成14年に「クリニックひろと」となりました。

病院から診療所へ転換しましたが、地域に密着した医療機関として、早期発見、早期治療をモットーに頑張っています。また、訪問看護、訪問リハビリ、人工透析も行なっております。

tel. 088-841-2327
fax. 837-2112

E-mail: kusunose@ps.inforiyoma.or.jp

▲すぐ隣は新川川

診療科目 ●内科、消化器科、循環器科、皮膚科、整形外科、神経内科、放射線科、リハビリテーション科

診療時間 ●9:00～12:00
14:00～17:00

休診 ●日曜、祝日、木曜午後



編集室通信

▼中年太りがあれよあれよという間に進行し、メタボリックシンドローム(内臓脂肪症候群)が気になり始めたこの頃。ボーダーラインだと言われ、「明日からは起きたらストレッチでもして…」と夜には思うが、朝になったら、時間もないし汗にもなるし…と、実行しない言い訳ばかり探す自分が居て苦笑させられる…。ひとには「あれが大事でこれも必要で」と、もっともらしくいうが、実行のなんと勇気の要ることか…と、今さらながら…(松)

図●書●室●便●り

管理棟図書室 (2006年6月受入分)

- ROCKWOOD AND GREEN'S FRACTURE IN ADULTS SIXTH EDITION VOLUME1,2 / ROBERT W.BUCHOLZ(他著)
- ROCKWOOD AND GREEN'S FRACTURE IN CHILDREN SIXTH EDITION / JAMES H.BEATY(他著)
- ARTHROSCOPIC KNOT TYING AN INSTRUCTION MANUAL / KEITH M.BAUMGARTEN(他著)
- COMPLICATIONS OF SPINE SURGERY TREATMENT AND PREVENTION / HOWARD S.AN(他著)
- MCGLAMRY' S FOREFOOT SURGERY / ALAN S.BANKS(他著)
- MASTER TECHNIQUES IN PODIATRIC SURGERY THE FOOT AND ANKLE / THOMAS J.CHANG
- ORTHOPAEDIC RADIOLOGY A PRACTICAL APPROACH 整形外科放射線診断学 原著第3版 / 守屋秀繁(他監訳)
- 最新整形外科学大系 13 肩関節・肩甲帯 / 越智隆弘(総編集)
- 私の手の外科 一手術アトラス 改訂第4版 / 津下健哉
- 骨・関節術後感染予防ガイドライン - CD-ROM 付 - / 日本整形外科学会診療ガイドライン作成委員会(他著)
- ひと目でわかる微生物検査アトラス / 守殿貞夫(他監修)
- クリニカルナース BOOK 看護診断による標準看護計画ガイド 臨床でよく使われる50の看護診断と看護介入 / 平木高夫(監修)
- 看護診断、共同問題によるすぐに役立つ標準看護計画 / 鶴田早苗(編集)
- 医療安全管理事典 / 長谷川敏彦(編集)
- 社会保障の手引き 平成18年1月改訂 施策の概要と基礎資料 / 中央法規出版(編集)
- 臨床研修必携 CPC レポート作成マニュアル / 田村浩一(編集)
- インターネット時代の英語医学論文作成術 プロが使っている究極のワザ / 田村房子
- CD で学ぶ外国人患者が来ても困らない外来診療のための英会話 / NORMA EWYSE(他著)
- WORD で医学英語論文を書こう / 芦田 廣
- 健康で働きやすい職場をめざして - 医療機関における過重労働・メンタルヘルス対策に係る基礎アンケート調査より / 財団法人 労災保険情報センター(編集)
- 医療連携のかなめ 地域医療支援病院 ~その準備から承認までのすべて~ / 木津 稔(編著)
- レセプト・カルテ記載のための ICD-10 対応 標準病名ハンドブック 標準病名マスター ver.2.40 / 医療情報システム開発センター(編集)
- 社員のモチベーションが上がる 給料と評価の革新 いますぐ使える CD-ROM 付 / 弥富拓海
- 類語国語辞典 / 大野 晋(他著)
- いのちを養う四季のスープ DVD+BOOK / 辰巳芳子
- あなたののためにいのちを支えるスープ / 辰巳芳子
- 《別冊・増刊号》 ● 別冊 医学のあゆみ 脳卒中 - 基礎研究と臨床の最前線 - / 篠原幸人(編集)
- 別冊 NHK きょうの健康 中年の目の病気 / 大鹿哲郎(総監修)
- 生涯教育シリーズ 69 実践救急医療 / 跡見 裕(監修)
- EMERGENCY CARE 2006 年夏季増刊 症状と疾患でわかる救急患者のケア プレホスピタルから ER まで / 野口宏(編集)